

市民文芸

歌壇

岩崎 聰之介 選

この地にも八十路の亡母は詣でしやわれに給
ひしみやげ売られ居り 石田みどり
避難所に暮らす乙女ら日に焼けて潮の香りの
笑顔を配る 遠藤 行夫
タダイマと帰って来そうなそんな夜逝きし
インコよおしゃべりピーコ 寺崎 悦子
自販機の節電消灯に羽根透けるかげろうの姿
今年みられず 鈴木 茂子
耳とほく聞き返すこと多くなり時に頓馬なう
けこたへする 阿部はぎの
つばめの巣日毎眺めて偲び居りはぐくみ下さ
れたるわがが父母 山田 演
何事も無かりし如く朝焼けて入江に黒く島山
の影 後藤今朝雄
恐怖心収まりたると思へども余震つづきて熟
睡せざる 佐藤喜和子
そろそろか聞こえてきそうな蟬のこえ網・籠
提げてあそびたる昔 遠藤 舞
農業を生業とする里の家風評被害になやみて
おりぬ 八嶋 正子

【評】一首目、みやげを介したお母上とのめぐり合い。そんな縁（えにし）への思いを詠まれた作品。
二首目、尊く、力強い若さを見届けておられる作者。結句が働いていよう。
三首目、リズムミカルにうたうが、哀しく響いてくる。

俳壇

遠藤 秋尾 選

避難所に思い馳せをりホトトギス 高子たちばあ
朝六つや時刻を知らず鐘涼し 遠藤 忠臣
愁いごと闇に散らして揚花火 岩松 隆志

柳壇

四電 英夫 選

定刻に空気を乗せたバスが行く 遠藤 行夫
雨音はブルーシートに跳ね返る 大庭 良子
デイサービス長持唄に出る涙 佐久間とみ子
縄のれん愚痴と愚痴とが交差する 草野 清
稔らない稲は微風に反り返る 石田みどり
長生きの褒美曾孫のオッピさん 阿部はぎの
近頃は予報に電気加えられ 寺崎 悦子
自然から生まれ還って行く命 山田 風流
紙面にもう大の字は見たくない 木村 貞雄
汚染源処理が進まぬ永田町 水戸 光穂

【評】一句目、マイカーの普及とともに、路線バスの利用が激減した。「空気を乗せる」の比喻が、空しい現実を象徴している。
二句目、震災で壊れた屋根に掛けられたブルーシートが痛々しい。見るたびにあの日の恐怖が蘇る。一日も早い復興を祈るばかり。
三句目、デイサービスの余興で聞いた長持唄。若き日の思い出が彷彿とし思わず涙した。帰らぬものは月日の流れ。むべなるかな。

—思いやりのある良質で信頼される医療を目指して—

公立刈田綜合病院紹介



視能訓練士紹介

眼科視能訓練士 鈴木 綾・鎌田 陽子

「視能訓練士」という職業を初めて聞いたという方もいると思いますが、視能訓練士は昭和46年に制定された国家資格で、眼や視覚に障害を持つ方に対し、眼の機能検査や矯正訓練を行う眼科の専門職です。

視能訓練士は、医師の指示のもと、眼科一般検査や特殊検査を行います。当院では主に、屈折検査、眼圧検査、視力検査、眼鏡処方のための検査、視野検査、色覚検査、眼底検査、眼底写真撮影、白内障の術前検査などを行っています。

当院の眼科には子どもから高齢の方々まで、さまざまな患者さまが通院されています。主訴や症状も異なるため、診察前の検査はととても重要です。

診察前の検査結果をもとに、正しい診断と治療を患者さまに提供することができるだけでなく、治療効果に対する評価にも検査結果が大きく影響します。多くの検査は患者さまの自覚的な応答によるものですので、検査を進めていく上で私たちは患者さまとのコミュニケーション

ンを大切にしています。

「目」は人間の一生にかかわります。私たちは眼科領域における専門技術者として、子どもから高齢の方々まで皆さまの大切な目の健康を守るお手伝いをしていきたいと思っています。

何かお困りのこと、不安なことなどがありましたら、気軽に声を掛けてください。



左から、鈴木綾、鎌田陽子

中学生か高校生の時かは分かりかねますが、幕末から明治時代の教科書に「太平洋を渡る咸臨丸」の挿絵が載っていたことを覚えていませんか？

咸臨丸とは、江戸幕府が海軍創設のためにオランダに発注した3本のマストを持つ、長さ48・8^尺、幅8・7^尺、排水量620^ト、最大速度6ノット（10km/h）、100馬力の補助蒸気機関の木造軍艦です。

1857年に長崎に到着後、海軍伝習所の練習艦となり、1860年に日米修好通商条約の批准書を交換するため遣米使節団一行が乗るアメリカ軍艦ポーハタン号の伴走船として太平洋を横断しました（挿絵はその時のもの）。

幕府の船として初めて太平洋を往復したことから名が知られておりますが、その時の船長は勝海舟。日本人だけでの太平洋横断と信じていました。しかし、アメリカ人クルーの手伝いがあったこと、ジョン万次郎以外の日本人船員は航海の大半を船酔いで苦しんでいたことなど、いろいろな裏話があるようです。

401名を乗せ北海道小樽を目指して出港しました。函館の先、サラキ岬（現木古内町）で暴風雨により座礁し、同年9月20日に破船沈没。乗船していた佐藤孝郷さんをはじめとする旧片倉家臣団は、当時の木古内町の方々に助けられました。その後、函館まで徒歩で戻り、後船の庚午丸で小樽に着き、今の札幌市白石区を開拓していくのです。つまり咸臨丸の最後の乗船者は、白石のご先祖さまということに

風のとこやき 「咸臨丸」

かんりんまる

したようで、日本人乗組員は連日の船酔いに苦しんだに違いありません。また、咸臨丸は洋式のスクリューを装備する完全な蒸気船だと思ひ込んでいましたが、そのスクリューを使うのは入出航時だけで、航海中は抵抗を減らすため水線上に引き上げる「補助蒸気機関を持つ木造軍艦」と言われています。

咸臨丸が沈没して今年で140年。今月24日に「咸臨丸終焉140周年記念式典」が、今も艦が沈んでいる北海道木古内町のサラキ岬で開催されます。ご先祖さまがお世話になった御礼と奥州白石を大いにPRしてまいります。時空を超えた縁に胸が高鳴っています。「縁は異なもの味なもの」といいますが、白石市は今年からスタートしている第五次総合計画で

「交流拠点都市」を目指していますので、これを契機に新たな交流が芽生えればと思っています。

10月1日には、ご先祖さまが活躍された大坂夏の陣道明寺口の戦いを題材とした「鬼小十郎まつり」が開催されます。市民の皆さまにも参加していただくとともに、お知り合いへの周知をお願いします。

活気ある白石、経済の活性化に向け、古に思いをはせながら、市民であることを誇りに思い、来白者におもてなしの心で接していただければと思います。

ちなみに「咸臨」とは「易経」よりとられた言葉で、「君臣が互いに親しみ合うこと」を意味するそうです。

まちの話題

～あの日、あの時～

転入者の方にと市民便利帳が手渡されました 「デイリータウンページ&ハローページ」+「白石市市民便利帳」

8月17日、「デイリータウンページ&ハローページ」+「白石市市民便利帳」受納式が市役所で行われ、各世帯への配布に先立ち、NTT番号情報株式会社（本社：東京都）桜井健一東北支店長から風間市長に、転入者の方に市民課窓口で配布するための便利帳が手渡されました。

風間市長は、「東日本大震災により一時は発行が危ぶまれましたが、市内の企業や団体、商店主の皆さまから多大なる協賛をいただき、発行することができました。多くの皆さまのお役に立てますことを期待しています」とあいさつ。桜井支店長は、「市民の皆さまの暮らしの中にあるさまざまなふれあいを集積するとともに、公共ガイドは質問形式で分かりやすい内容にしました。市民の皆さまの生活の利便性の向上につながればと思います」とあいさつしました。

配布はNTT番号情報の委託業者が行います。9月上旬までにご自宅に届かない場合は、総務課（☎22-1331）までご連絡ください。なお、便利帳末巻に「読者アンケート&プレゼント」を掲載しています。ぜひ、ご応募ください。

※便利帳58ページの施設サービスに掲載されている「地域密着型介護老人福祉施設あさくらホーム」は、「老人保健施設あさくらホーム」の誤りです。お詫びして訂正します。

